

バッキュリデースの詩第 17 番の解釈における諸問題

阿 部 達 哉

バッキュリデースの作品の中で第 17 番の詩は、それを伝えるパピルスに多数の箇所欠損があるとはいえいずれも短く、本文の状態は比較的良好であり、今日においてこの詩人の代表作とも言うことができる。この詩は途中にある格言と結末の部分を除くると、ほぼ全体がテーセウスの神話から成り立っている。クレタ島のミーノース王は妻パーシパエーと牡牛との間に生まれた怪物ミーノータウロスに迷宮の中に住まわせていて、これに対して定期的にアテネの少年少女が食物として捧げられることになっていたが、テーセウスが迷宮の中には行ってミーノータウロスを退治し、犠牲となるはずの人たちを救った。バッキュリデースのこの詩はミーノータウロスをめぐる神話の中からテーセウスとミーノースが乗り込んだ船でアテネからクレタ島に生贖の少年少女を運んで行く途中に起こった出来事を歌っている。この詩に関しては昔から近年に至るまで一体ディーテュランボスであるのか、それともバイアーンであるのか、さらにはヒュムノスあるいはヒュポルケーマであるのかという合唱抒情詩の中での分類についての論争が一面では盛んになされているが、ここではそのような種別についての問題に立ち入らず、この詩の内容をおおむね順を追ってたどってみる。

この作品には第 16 番や第 19 番の詩などにあるムーサへの言及のような序に相当する部分もなく、なおかつ神話の内容についても何の前置きもなく突然始まり、そこに至った事情はその後の本文中にも語られていないが、テーセウスとミーノースと生贖の 7 人ずつのアテネの少年少女を乗せた船がクレタ島に向かって海を走っている。船上でミーノースの心をキュプリスの聖なる贈物¹である少女の魅力が動かし、その白い頬に触れる。物語の初めにおいてキュプリス

¹ 10 行めは F. Blass に従って *Κύπριδος [ἀ]γνά δῶρα* と読む。Pind. *Pyth.* 1, 21-22 ἀπλάτου πυρός ἀγνόταται | ἐκ μυχῶν παγαί とあり、E. Cingano, in: B. Gentili - P. Angeli Bernardini - E. Cingano - P. Giannini, *Pindaro. Pitiche*, Milano 1995, 337 は ἀγνός が崇拜と関連するものを示すと述べている。また *Ol.* 7, 60 ἀγνόν θεόν に関して W. J. Verdenius, *Commentaries on Pindar*, 1, Leiden 1987, 75 はそれに対して畏敬のふさわしいものと言っている。なお Anacr. 56, 3 Gentili = *eleg.* 2, 3

についての言及があり、このことはあとでテーセウスがアプロディーテーからの贈物を受け取ることの伏線となっている。この出来事に際してこの少女エリポイアはテーセウスに向かって助けを求めて叫ぶ。これを受けてテーセウスはミーノースに対してまずゼウスの息子と呼び掛け、やがてポイニクスの娘（エウローペー）とゼウスが交わって生まれたものと述べ、一方自分に関してはピッテウスの娘（アイトラー）とポセイドーンの間にも生まれたと言うが、ここでは両者の家系が語られている。なお自己の誕生の際にはネーレウスの娘が黄金のペールの類いを贈ったと語る。そして船上の少年少女のうち誰かが嫌がらせを受けるのであれば、自分は死ぬことさえ考えていると述べて、ミーノースに自制を求め、さらに自ら腕の力を示そうと言う。ミーノースがエリポイアの頬に触れたという行為は些細なことであるが、それに対する第三者のテーセウスの発言はおおげさである²。

テーセウスの大胆な意見の表明に船乗りの人たちは驚く。テーセウスはミーノースに対して怒った³が、ここでは地の文でミーノースがヘーリオスの婿であることが言及されていて、その娘パーシバエーと結婚している。ミーノースは新たな計略を考え出して反論するが、まず Ζεύ πάτερ(53) と呼び掛け、これは単なる祈りの決まり文句にとどまらず、ミーノースにとってはゼウスが実の父である。そしてテーセウスがミーノースに対する意見を言っただけなのに対して、ミーノースはまずゼウスに向かって、もしも自分をフェニキアの女がゼウスの子として生んだのならば、その証しに雷を落とすように願う。一方テーセウスにはもしもトロイゼーンのアイトラーがポセイドーンの子として生んだのならば、これから投じる黄金の指輪を深い海から拾って来るように命ずる。ここでもまた両者の家系が語られている。この発言の直後にゼウスは自己の息子ミーノースの求めに応じて雷を落とすが、これに対する船上の人々の反応は何も表現されていない。このあとミーノースは高い空に手を揚げて短いせりふを

West Mouséων τε καὶ ἀγλαὰ δῶρ Ἄφροδίτης とある。

² J. Stern, «The Structure of Bacchylides' Ode 17», in: *RBPB* 45, 1967, 43 がそう言っている。R. Führer, *Formproblem-Untersuchungen zu den Reden in der frühgriechischen Lyrik*, München 1967, 107 はこの発言を戦争の演説と分類している。

³ Ἄλιου τε γὰμβρῶν χόλωσεν ἦτορ(50) の主語は O. Vox, in: *Lirica greca*, a cura di F. De Martino e O. Vox, 1, Bari 1996, 476 や H. Maehler, *Die Lieder des Bakchylides*, 2, Leiden – New York – Köln 1997, 194 の言うとおり、テーセウスである。しかし H. García Romero, *Baquilides. Odas y fragmentos*, Madrid 1988, 166 や J. Duchemin – L. Bardollet, *Bacchylide. Dithyrambes – Épinicies · Fragments*, Paris 1993, 32 などはミーノースが怒るとしている。

述べ、父ゼウスからの贈物の雷をはっきりと見ただろうから、今度はテーセウスがその父ポセイドーンの助力を受けるだろうと言って、海に飛び込むように求める。ここでも三度めに両者の家系が引き合いに出されている。ほかにも 15-16 行めのせりふではない地の文でテーセウスはバンディーオーンの子孫と述べられているが、表向きバンディーオーンの息子アイゲウスの子でもある⁴。ミーノースはここでテーセウスがポセイドーンを父とするのかどうか疑っている。テーセウスはためらいもなくすぐ海中に飛び込み、ミーノースはこのことに驚き、二度と戻って来ないであろうと想像する。ミーノースはこの詩の中で否定的な人物として表現されていて⁵、ゼウスに雷を求めて待ち受けただけなのにに対して、テーセウスは強要されたとはいえ主体的に自ら海にはいる。運命が別の道を取らせるが、別の道とはミーノースから見てのことであり⁶、さらに海中のテーセウスにはミーノースを含めて船上の人々にとっても聴衆にとっても予想外の出来事が展開する。このあと船は進み続け、その上に残されたアテネの少年少女は不幸な状況を思って落涙するが、ここはテーセウスのいない場面である。

この詩は 96 行めを境に二つに分かれるとみなすのが妥当であり⁷、前半はアテネからクレタ島に少年少女を連れて行く船の上でのテーセウスとミーノースとの争いからなり、97 行め以下の後半はテーセウスが海中で体験した出来事とそこから船への回帰を扱っている。この詩の前半においては表現が過剰でおおげさであるが、後半では抒情的な表現が見られ、踊るネーレウスの娘とアンピトリーテとの女性的世界が現れる⁸。この詩は全 132 行中三分の一以上の 49 行をテーセウスとミーノースのせりふが占めているが、それは前半のみに位置

⁴ アイゲウスはトロイゼーンのピッテウスのもとにやって来てその娘アイトラーとともに寝て、同じ夜にポセイドーンもこの女性と交わった (Apollod. *Bibl.* 3, 15, 7)。こうしてアイトラーからテーセウスが生まれた。なお同じ詩人の第 18 番の詩はコロスとアイゲウスとの対話だけからなり、この人物はテーセウスの英雄的行為についての伝聞を語っているが、聴衆に向けてこのアイゲウス自身がその父であることを前提に作品が出来上がっている。

⁵ A. Villarrubia, «Minos y Teseo. Análisis de la oda XVII de Baquílides», in: *Habis* 21, 1990, 22 が指摘している。

⁶ L. Käppel, *Paian. Studien zur Geschichte einer Gattung*, Berlin - New York 1992, 170, n. 55 参照。

⁷ G. Ierandò, «Il ditirambo XVII di Bacchilide e le feste apollinee di Delo», in: *QS* 30, 1989, 161 の分け方による。しかし G. W. Pieper, «Conflict of Character in Bacchylides' Ode 17», in: *TAPhA* 103, 1972, 398 は 81 行めを境としている。また L. T. Percy Jr., «The Structure of Bacchylides' Dithyrambs», in: *QUCC* 22, 1976, 93-94 は 1-23 行めと 24-116 行めと 119-132 行めと三分割している。

し、後半にはせりふがなく、前半の論争から一転して穏やかな状況が繰り広げられる。テーセウスが海に飛び込むと、周辺にいるかが集まって来て、馬に乗るようにいるかに乗り⁹、ポセイドーンの宮殿に到着する。ところが最初から最後までこの神自身は現れない。テーセウスはまずそこでネーレウスの娘の体が火のように輝き、髪の毛には黄金の髪飾りを着けていて、しなやかな足をういて喜びながら踊っている様子を見て驚く。その後父ポセイドーンの子であり牛の目をしたアンピトリーテーと館の中で出会い、この女神はテーセウスに紫の外套を着せ掛けるが¹⁰、これはポセイドーンが準備していた贈物であるとも、アプロディーテーに由来するとも推定できる。さらにテーセウスの豊かな髪に非の打ち所のない薔薇の花の黒っぽい冠を被せるが、これはアンピトリーテー自身の婚礼の際にアプロディーテーが贈った薔薇の花の冠によって飾られた黄金の冠である¹¹。これまであまり重視されていないが、この詩の後半の中でもテーセウスの海中での物語は静寂な幻想的な世界が展開し、とりわけアンピトリーテーとの邂逅の場面は美しい箇所である¹²。沈黙の中で女神が英雄をもてなして

⁸ J. Stern, (n. 2) 45 による。

⁹ R. Janko, «Poseidon Hippios in Bacchylides 17», in: *CQ New Series* 30, 1980, 258 がそう言っているが、すぐあとに παρὸς ἵππιου (99-100) という表現がある。

¹⁰ δῖονα (112) に関して editio princeps の F. G. Kenyon, *The Poems of Bacchylides*, London 1897 は理解不能とみなしているが、F. Blass, *Bacchylidis Carmina cum fragmentis*, Lipsiae 1904³ は apparatus criticus において何らかの衣服を意味しているが全面的にはわからない単語と記している。K. Latte, «Randbemerkungen, 7», in: *Philologus* 87, 1932, 271-272 = *Kleine Schriften zu Religion, Recht, Literatur und Sprache der Griechen und Römer*, München 1968, 708-709 はヘシキオスの ἔλυμα の説明の中の καὶ τὸ ἱμάτιον καὶ ἡ δῖονα[sic] を挙げた上で麻の外套とみなしている。F. R. Adrados, *Diccionario Griego-Español (DGE)*, 1, Madrid 1980, s. v. δῖων では麻の衣服としてバッキュリデースのこの箇所から収録している。これに対して B. Gentili, «Il ditirambo XVII Sn. di Bacchilide e il cratere Tricase da Ruvo (CVA, Robinson II, tav. 31-2)», in: *ArchClass* 6, 1954, 123-124 は房飾りの付いた肩掛けと言っている。一方 G. J. Giesekam, «Some Textual Problems in Bacchylides XVII», in: *CQ New Series* 27, 1977, 252-253 はこの箇所について赤らんだ顔の下半分を抱き締めると言っている。さらに J. S. Lasso de la Vega, «Nuevas notas a Baquilides», in: *Minerva* 2, 1988, 115 は海の縁で抱くとしている。この詩人自身 18, 52 χιτῶνα πορφύρεον と衣服を表現していて、さらに Sim. 543, 16-17 Page πορφύρεα ... χλαδίτι と類似した例があり、ここで ἀμφέβαλεν δῖονα πορφύρεον と述べていて、また 124 行めで全身が神の贈物で輝いているので、やはり外套を着せるとみなすべきである。

¹¹ 本文では冠が黄金製とは言われていない。B. Zimmermann, *Dithyrambos. Geschichte einer Gattung*, Göttingen 1992, 78 は黄金の冠と言っているが、H. Maehler, (n. 3) 2, 204 の言うとおり薔薇の花で飾られた黄金の冠であろう。II. 22, 470-472 ではアプロディーテーがヘクトールとの結婚の際のアンドロメーネにペールを贈った。

¹² H. Fränkel, *Dichtung und Philosophie des frühen Griechentums*, [New York 1951¹] München 1969³, 516 はこの詩について論じたあと、バッキュリデースの作品全般に独自の価値がないと言っている。しかしこの種の Ps.-Long. *De subl.* 33, 5 に代表されるような古くからある見解に対して J.

Stern, «An Essay on Bacchylidean Criticism», in: *Pindaros und Bakchylides*, hrsg. von W. M. Calder

贈物を授けるのであり、テーセウスはあたかもポセイドーンとアンピトリーテーの間の息子であるかのように扱われる。テーセウスの母は当人自身 34 行めでピッテウスの娘と、ミーノースも 59 行めでアイトラーと言っているが、父の妻であるアンピトリーテーの振舞はまるでこの女神がテーセウスの母親であるかのような印象を与える。なおアンピトリーテーもネーレウスの娘であるが、他の陽気に踊っている少女と厳かな成人のこの女神との間には歴然たる相違が見られる。

この詩の中の物語はキュプリスからの贈物である少女の魅力に動かされたミーノースがその頬に触れることによって始まる。そしてアンピトリーテーが義理の息子であるテーセウスに薔薇の冠を被せるが、これはその結婚の際にアプロディーテーから贈られたものであり、さらに結末近くでこれが外套などとともに人々を驚かせる。すなわちこの詩の重要な物語は愛の女神であるアプロディーテーからの贈物によって始まり、同様の物によって終わる¹³。しかしいづれの箇所でも人の心に密かに忍び込む狡猾なアプロディーテーは直接登場しない。とはいえこの詩の重要な主題はアプロディーテーの愛であり、テーセウスの潜水は愛の初心者が見て愛の中に飛び込んで行くこと¹⁴を意味していて、詩の中には愛に関連する表現が散在している¹⁵。またアンピトリーテーがテーセウスに着せ掛ける外套の色は紫であるが、アナクレオンによればアプロディーテー自身が紫の衣服を着ている¹⁶。そしてアンピトリーテーが被せる冠の薔薇の花は愛と関

III und J. Stern, Darmstadt 1970, 290-307 はこの詩人に新たな価値を見出そうとしていて、G. Ierandò, (n. 7) 157-183 も同様の傾向にある。

¹³ R. Scodel, «The Irony of Fate in Bacchylides 17», in: *Hermes* 112, 1984, 141 参照。C. G. Brown, «The Power of Aphrodite: Bacchylides 17,10», in: *Mnemosyne* 44, 1991, 335 の言うとおり、アプロディーテーはテーセウスの支援者であり、ミーノースの敵である。

¹⁴ Anacr. 94 Gentili = 376 Page ἀρθεῖς δὴ ὄψ' ἀπὸ Λευκάδος | πέτρης ἐς πολὶὸν κύμα κολυμβέων μεθύων ἔρωτι 参照。

¹⁵ G. Ierandò, (n. 7) 162, n. 21 が指摘していて、具体的には ἐρατῶννος κόρα (31-32) と ἐραννόν ... φάος (42-43) と ἐρατοσίον ... δόμοις (110-111) と ἐρατῶ ὀπί (129) といった形容詞を用いた表現がある。また μιγεῖσα (31) 及び πλαθεῖσα (35) という語が用いられている。その半面で確かにこの詩の中にはテーセウスに μενέκτυπονι (1) と χαλκοθώρακα (14-15) と ἀρέταιχος (47) というように戦士の特性を示す表現がなされていて、ミーノースには πολέμαρχε (39) と μενεπτόλεμος (73) と στραταγέταν (121) と類似した語が用いられていて、さらにアテーナーに πη|λεμαίγιδος (7) と、ゼウスに μεγαλοσθενής (52) と μεγαλοσθενή|ς (67) と形容詞が付されているように、逆に戦争を連想させる単語も用いられているが、海中の場面ではそのような語は用いられていない。

¹⁶ Anacr. 14, 1-4 Gentili = 357, 1-4 Page ὦ Ὀνοξ, ὦ δομάλης ἔρωσι | καὶ Νύμφαι κυανώπιδες | πορφυρέη τ' Ἀφροδίτη | συμπαίζουσι とある。

連し、この花はアプロディーテーにとって神聖である¹⁷。作品の効果はその続きの知識に関わっている点もあり¹⁸、この詩は聴衆にテーセウスの将来の恋愛をも想像させる。この詩の物語のあとテーセウスは一行とともにクレタ島に着き、アリアドネーとの恋愛に陥り、その助力によって迷宮の中のミーノータウロスを追放して、それに捧げられるはずであったアテネ人の少年少女を救う。このように詩の中に言及されていない続きの物語においても愛は重視されている。

ミーノースが生贄の少年少女を引き取りに自らアテネにやって来て、この人物と争い海中に潜るテーセウスの神話は文献としてはほかにバッキュリデースよりはるかあとの時代の僅かなものにおいてしか伝わっていない。パウサニアース (1, 17, 3) はアテネのテーセウスの神殿にあったミコン作の絵画の内容を伝え、そこではテーセウスは指輪とアンピトリーテーから贈られた黄金の冠とともに海から帰って来た。一方ヒュギーヌス (*Astr.* 2, 5, 3) はこの神話を概説的に語っているが、その結末においてテーセウスはネーレウスの娘たちからミーノースの指輪を受け取り、ウェヌスから結婚の贈物としてもらった沢山の宝石で輝く冠をテティスから受け取るが、異説として冠をネプトゥーヌスの妻から受け取ることが挙げられている。なお両者ともテーセウスが外套を着せ掛けられることには言及していない。しかしテーセウスがクレタ島に行き、アリアドネーとの恋愛が生じ、ミーノータウロスを追放するという伝説は古くからあった¹⁹。この詩の前半はクレタ島に少年少女を連れて行く船の上でのテーセウスとミーノースの争いからなり、後半はテーセウスが海に潜り義母のアンピトリーテーにもてなされる話からなり、それぞれ独立した物語であったこの両者

¹⁷ C. Segal, «The Myth of Bacchylides 17: Heroic Quest and Heroic Identity», in: *Eranos* 77, 1979, 32-33 = *Aglaiā. The Poetry of Alcman, Sappho, Pindar, Bacchylides, and Corinna*, Lanham 1998, 303 参照。パウサニアース (6, 24, 9) は薔薇と銀梅花がアプロディーテーにとって神聖であると言っている。Meleagr. *Anth. Pal.* 5, 136, 5 *δοκρῦει φιλέροστον, ἰδοῦ, ῥόδον* また 5, 147, 4 *πλέξω κοί φιλέροστα ῥόδο* とあり、薔薇の花は愛する人を愛する物である。

¹⁸ R. Scodel, (n. 13) 142 がそう言っている。たとえばこの詩人の第 5 番の詩はその中の神話の部分で冥府においてのメレアグロスと生きているヘーラクレスの出会いを題材にしていて、前者は過去の英雄的行為のカリュドーンの猪狩りとその際の自己の死を述べ、これに対してヘーラクレスは死んだこの人物の家に未婚の女性がいたら自分の妻にしたいと言い、メレアグロスは妹のデーイアネイラのいることを告げる。このヘーラクレスとデーイアネイラの結婚は本文中に表現されていないが、これを聴衆は想像できる。

¹⁹ 失われた叙事詩「キュプリア」ではネストールがテーセウスとアリアドネーについて語っていた (*Procl. Chrest.*, p. 40 Bernabé = p. 31 Davies)。

をバッキュリデースが一つにまとめたようである²⁰。これに際して指輪の物語は詩人が意図的に付け加えたと推定される²¹。しかしそれにもましてアンピトリーテーがテーセウスに外套と冠を与えたことこそ、たとえこの詩人の創作ではないとしても、一層重視すべき点である。また詩人は愛の主題が作品の全体を貫くように工夫している。

117-118 行めの神々の定めることで賢明な人間にとって信じがたいことは何もないというのはこの詩の中で最も格言らしい格言であり、前後のそれぞれ神々に由来する驚くべき現象を詩の結末近くで結び付けている²²。テーセウスが海中で体験した出来事は船上の人にとって予想外のことであり、海から濡れもせずに出て来て船の上に現れ、体に女神からの贈物を着けて輝いていることは聴衆にとっても驚きであり、この格言は神話に対しての詩人自身の発言でもある。この詩にはほかにも格言に近い表現があり、なおかつ 24-28 行めで *μοῖρα* と *αἴσα* が、46 行めで *δαίμων* が、89 行めで *μοῖρα* がそれぞれ物事を定めると述べられていて、おのおのの箇所で内容の切れ目を繋いでいる。ここでも *δαίμονες* が定めるが、この格言にはテーセウスの活躍する舞台が海中から突然船上に移ることを円滑に繋いで表現する機能もある。

テーセウスが船に戻って来たあと、船上の 7 人の少女は新たな喜びに声を上げ、そばにいる 7 人の少年も愛らしい声で歌う。しかしこのことに関しては海にいるネーレウスの娘が歓声を上げ、船上の少年少女が歌うという別の解釈があり²³、これがかつての通説であった。すなわち 124-125 行めの *ἀγλαόθρονοι...κούραι* が 101-108 行めに出るネーレウスの娘を指すという説と、船の上のアテネの少女を指すという説とがある。従来からある第一の見解ではまず *ἀγλαόθρονος* というさほど用いられない形容詞は *ἀγλαός* と *θρόνος* との合成語と判断され、神や高貴な人物を修飾するとみなされ、それがネーレウスの

²⁰ G. Ierandò, (n. 7) 161 やほかの学者の推定である。

²¹ E. Wüst, «Der Ring des Minos. Zur Mythenbehandlung bei Bakchylides», in: *Hermes* 96, 1968, 533 がそう言っている。

²² J. Stenger, *Poetische Argumentation. Die Funktion der Gnomik in den Epinikien des Bakchylides*, Berlin - New York 2004, 78-80 参照。詩人はここで *ἀπιστον ὅ τι δαίμονες | θέλωσιν οὐδὲν φρενοάρας βροτοῖς* と言っているが、3, 57-58 *ἀπιστον οὐδὲν, ὅ τι θεῶν μέ]ριμνα | τεύχει* と類似の表現があり、両方ともに接続小辞省略が見られる。Pind. *Pyth.* 10, 48-50 も似たような格言である。

²³ 最近では R. Scodel, (n. 13) 138 や G. Ierandò (n. 7) 173 や B. Zimmermann, «Bacchyl. XVII 124s. Sn. M.», in: *MCR* 25-28, 1990-1993, 39-41 が主張している。

娘に当たるとされる。また σύν εὐθυμία νεοκτίτω (125-126) については海中で楽しく踊っていたネーレウスの娘がテーセウスの船に戻ったのを見てあえて再び喜ぶと捉える。こうしてὠλόλυξαν (127) の主語がネーレウスの娘とみなされて、さらにそのあと海がざわめく (127-128) が、ネーレウスの娘の歓声が反響したと考えられる。最後にその近くの船上で少年少女が歌うとみなされる。

第二の見解では ἀγλαόθρονος という形容詞が必ずしも高貴な人物や神のみにとどまらず神話上の人物全般特に少女をも形容するとみなし、船の上の 7 人の少女を修飾していると判断する²⁴。そもそもこの語は神話上の人間及び神にしか係らない。この合成語の前半を構成する ἀγλαός という形容詞がこの詩の中に 3 度現れ、ἀγλαούς ... κούρους (2) と 14 人の船上のアテネの少年少女に、ἀγλαῶν ... γυίων (103-104) とネーレウスの娘の体の修飾にそれぞれ用いられているので、その合成語も両方を形容する可能性があり、さらに τόνδε χρύσειον χειρὸς ἀγλαόν...κόσμον (61) とミーノースの指輪を修飾している。しかし合成語の後半は θρόνος ではなく、θρόνα (複数形) とみなすのが妥当であって、全体として服に美しい花の刺繍をしたという意味であり、この点からも特に神と高貴な人物だけを形容すると判断すべきではない。この複合形容詞はピンダロスが *Ol.* 13, 96 Μοίσαις ... ἀγλαοθρόνοις のほか、*Nem.* 10, 1 Δαναοῦ πόλιν ἀγλαοθρόνων τε πεντήκοντα κορᾶν とも用いている²⁵。ダナオスの 50 人の娘は確かに女王という身分ではあるがあくまで死すべきものである点、及び船上の 7 人のアテネの少女は必ずしも高い身分ではないにしても神話上の人物である点を重視して、パッキュリデースはこの形容詞で生贄として捧げられるはずのアテネの少女を修飾していると考えられる²⁶。また κοῦραι という名詞については別な語形を含め

²⁴ C. Calame, *Les Chœurs de jeunes filles en Grèce archaïque*, 1, Roma 1977, 149 や D. E. Gerber, «Bacchylides 17,124-29», in: *ZPE* 49, 1982, 3-5 や L. Käppel, (n. 6) 174-177 の意見である。なお H. Maehler, *Die Lieder des Bakchylides*, 1, 2, Leiden 1982 は 14B, 1 ἑστία χρυσόθρον(ε) の注釈において第一の見解を採っていたが、*op. cit.*, 2, 1997, ad 17, 124-5 において第二の見解に修正している。

²⁵ なお B. Snell は *Paе.* 3, 1-2 ἀγλαόθρονοι τε σεμ]νοὶ Χόριτε[ς]と補綴しているが、これは最近の校訂本 *Pindaro. I peani*, a cura di G. Bona, Cuneo 1988 でも *Pindari Carmina cum fragmentis*, 2, edidit H. Maehler, Leipzig 1989 でも採用されていない。

²⁶ R. Merkelbach, «ἀγλαόθρονος», in: *ZPE* 11, 1973, 160 = *Philologica. Ausgewählte Kleine Schriften*, Stuttgart - Leipzig 1997, 311-312 はこの語の意味を衣服の上にすばらしい花の刺繍をしたとみなし、合成語の後半を θρόνα と判断して、パッキュリデースのこの箇所についてアテネの少女を修飾していると解釈していて、合成語の類例として ποικιλόθρονος と εὐθρονος を挙げている。恐らくこの論文に従って F. R. Adrados, *DGE*, 1, 1980, s. v. ἀγλαόθρονος はこの語を

てこの詩の中でほかに 3 度用いられていて、κούρους(3) は男女両方の船上の少年少女を表現していて、Νηρήος ... κόρας (103) はネーレウスの娘であり、この 125 行めの場合にも船上の少女とネーレウスの娘の両方を意味する可能性があり、さらに Φοίνικος ... κόρα (32) とエウローペーについて述べられている。そして σύν εὐθυμιά νεοκτίω(125-126) に関してはテーセウスが海に沈んで 94-96 行めで落涙した船の上の少女が帰って来たこの英雄を見て新たに喜ぶというように判断する。ὠλόλυξαν は人間の女性や女神が特に神に対して声を上げることであるが、ここではテーセウスが神々からの贈物の紫の外套と薔薇の冠を身に着けて海から濡れもせずに戻って来たという文脈から、船上の少女の歓声が神的な表現で述べられている。また海に少女の歓声が反響したのではなく、ポセイドーンの意向によってそのとどろきが生じたのであり、71 行めのミーノースの求めに応じて落とされたゼウスの雷と対比することも可能なので、強いて言えばこれはこの神がテーセウスの本当の父であるという証しになるとも考えられる。詩人は意図的にポセイドーン自身を登場させず、結末で海の神によってなされた行為を表現しているようである。少女に対応して、ἡίθειοι ... νέοι παιάνιξαν (128-129) は少年が声を上げて歌うとみなすことができる。ἡίθειοι という語は 43 行めと 93 行めではいずれも男女両方を意味しているが、ここでは男子のみを指す²⁷。παιάνιξαν はバイアーンを歌ったという意味であるが、少女が歓声を上げたことをὠλόλυξαν と言ったのに対して、少年も神聖に歌ったように表現されている。この第二の説に従って、ネーレウスの娘についての再度の言及はなく、船上の少女が歓声を上げ、少年が歌うとみなすのが妥当である。

この詩は言語の豊富さや生き活きた描写などからバッキュリデースの作品

高価な花の刺繍をしたという意味に採り、少女と女性の神格とについてと補足していて、ピンダロスの 3 箇所（前注をも参照）とともにバッキュリデースのこの箇所を挙げていて、κούραι がダナオスの娘を指すと明言しているが、θρόνον を参照するように示している。H. Frisk, *Griechisches etymologisches Wörterbuch*, 1, Heidelberg 1960, s. v. θρόνα にこの合成語は記載されていないが、別の合成語として ποικιλόθρονος と χρυσόθρονος と ἀργυρόθρονος の例が挙げられている。なおこの合成語と必ずしも密接な関連性はないが、Tyrt. 6-7, 28 Gentili - Prato = 10, 28 West ὄφρα ἔρατῆς ἡβης ἀγλαόν ἄνθος ἔχη という表現がある。また W. B. Henry, *Pindar's Nemeans. A Selection*, München - Leipzig 2005, ad *Nem.* 10, 1 のように合成語の後半を θρόνος とみなした上でこの箇所の語句をアテネの少女と解釈する見解もあるが、この学者はこれらの合成語が伝説上の女性及び女神を修飾していることを適切に指摘している。

²⁷ ここでは κούραι と ἡίθειοι が男女を対比しているが、さらに明快な例として *Il.* 18, 567 παρθενικαὶ δὲ καὶ ἡίθειοι と *Il.* 18, 593 ἡίθειοι καὶ παρθένοι と *Il.* 22, 127-128 ἄ τε παρθένος ἡίθεός τε. | παρθένος ἡίθεός τ' と *Od.* 11, 38 νύμφαι τ' ἡίθειοι τε がある。

の中で傑作と言える²⁸。また物語の一貫性が明確に見て取れ、叙事詩の原則のように時間の進行に従って物語が進んでいて²⁹、ここではビンダロスのエピニーキオンに見られるような時間の進行と大胆に逆転する神話の叙述法は用いられていない。敵役ミーノースと重要な脇役アンピトリーテーなどが次々現れる中で、テーセウスが主役を演じ、船上から海中までほぼ大部分にわたって登場するように描かれている。この詩においては同一の語や類似した表現が繰り返されていて、対語や頭韻が用いられもしている³⁰。さらにこの詩の中では神話が流麗に記述されている。具体的に例を挙げると、エリポイアは一度だけ名前が示され、テーセウスとミーノースの論争の原因となるが、あとは他の少女の中に埋没してしまう。またテーセウスはポセイドンの館に連れて行かれるが、そこにこの神は現れず、その妻アンピトリーテーが応対する。あるいは海に飛び込んだテーセウスはいるかに連れられていたが、帰路はいるかに乗っているのが単独なのか述べられていず、突然濡れもせずに船に戻って来る。そしてテーセウスはそもそも直接の動機としてはミーノースの指輪を拾うために海に飛び込んだが、その後これについての言及はない。こういったことが一見不自然ではないように叙述されている。この詩においては前半の争いや悲しみに対して後半の穏やかさや喜びが対照的に表現されているが、前半はイーリアス風と、後半はオデュッセイア風と呼ぶことができる³¹。アプロディーテーに促されたパリスによるヘレネーの誘拐によってトロイア戦争が始まったように、キュプリスの贈物によってミーノースとの論争が始まり、そのような状況においてテーセウスは、テーレマコスがその父オデュッセウスを捜しに出掛けたように、父ポセイドンの存在を求めて海中に潜り、結局その妻アンピトリーテーを通してアプロディーテーからの贈物を受け取り、その愛に感化されて、船に戻って来る。愛はこの詩において重要な主題である。一方ミーノースが指輪を海中から拾って来るように求め、それ以後これについては触れられず、テーセウスが持つて

²⁸ C. Segal, in: *Eranos* 77, 1979, 23 = *Aglaia* 295 や E. Robbins, «Public Poetry», in: *A Companion to the Greek Lyric Poets*, edited by D. E. Gerber, Leiden – New York – Köln 1997, 286 はそう言っている。

²⁹ E. Wüst, (n. 21) 537 の指摘による。

³⁰ G. W. Pieper, (n. 7) 395-404 が随所で指摘していて、A. Guzmán Guerra, «Función de las repeticiones verbales en Baquflides: la estructura de la oda 17», in: *Habis* 7, 1976, 12-19 はより詳細に挙げている。本文中で論じた ἀγλαός と κούρος 及び κόρα と ἡίθειοι などのほか、たとえば ὄσρα (10, 76, 124 行め) が繰り返しの一例である。

帰って来たのかどうか表現されていないが、作者は指輪のことを忘れたのではなく、それについても語る必要がないので、何も言わない。

³¹ C. Segal, in: *Eranos* 77, 1979, 36 = *Aglaia* 306-307 がそのように言っている。